

甌島調査報告

「鹿の子百合の咲く島——里町における鹿の子百合栽培の変遷」

三浦尚子

はじめに

甌島は鹿児島県薩摩半島の西方海上約28kmに北東から南西に連なる列島で、上・中・下甌島の有人3島と多くの無人の小島よりなる。かつての大山脈の頂上部分が残ったものといわれる甌島は、起伏に富み、沈降作用と海波による多くの潟湖とリアス式海岸がある。甌島の北東端に位置する里町は、串木野新港からのフェリー最初の停泊地である。小規模ではあるが、江戸時代の郷士の居住地であった武家屋敷跡地もある。現存する数百メートルにわたる石垣には、島の特産物で鮮やかな紅色をした鹿の子百合がそこかしこから顔を覗かせている(写真1)。

甌島は、薩摩川内市の市花に指定されている鹿の子百合の唯一の自生地とされる。1950年(昭和25年)から1969年(昭和44年)にかけて、海外で観賞用としての需要が高まったことから、鹿の子百合の球根が高値で輸出され、農業の最盛期を迎えた。しかし、現在の里町の土地利用は、総面積1,726haのうち、山林が1,110haで64%を占めるが、田畑は約20.7haと農業用地は狭小である。また農業戸数も、1960年当時の里村の総農家数



写真1 鹿の子百合

は566戸であったが、2002年の調査では83戸で、そのうち自給的農家が73戸を占めるため、農業で生計を立てている農家は顕著に少ない。[離島センサス：2002、農業集落カード：1970、2000]現在、鹿の子百合出荷を従事している農家は「鹿の子百合生産振興協議会」のみである。

私の関心は、里町における農業の盛衰の背景と衰退後の鹿の子百合の現状の考察にある。鹿の子百合を甌島の「遺伝資源」として未来へ継承すべく活動する協議会代表H氏、及び協議会を支援する薩摩川内市里支所D氏からの聞き取りに基づきながら、里町における農業、主に鹿の子百合生産の変遷を読み解きたい。

1. 鹿の子百合と里町[村]の農業

1-1 鹿の子百合とは

「さゆり花 ゆりも逢はむと 思へこそ 今のまさかも うすはしすみれ」

(百合の花という感じだ。また逢いたい。だから、今このときも親しくするのです。)万葉歌人である大伴家持が薩摩守の任についていたときに、親しい交際相手の女性へ詠んだ歌といわれる[朝日新聞:2006/6/12]。昔から百合が美しさを表象し、また当時すでにこの地域に百合が生息していたことが伺える。

頭を垂れたように、花卉が下向きである鹿の子百合は、観賞用としては珍しい品種である。しかし、大輪で鮮やかな紅色をした鹿の子百合は大層美しい。

鹿の子百合は、乾燥に強く比較的生命力の強い品種であるが、反面蒸れに弱い。鹿の子百合の開花の時期は7月～8月上旬であるために、トラック輸送中の高温多湿の状況下では花全体がへたってしまい、商品価値が下がる。これが、鹿の子百合が生花の形態で市場に流通しない原因といえよう。

また、鹿の子百合は連作が出来ないため移動耕作が必要となる。甌島における往古の慣例として

山焼きを実施し土壌の養分回復を図っていたが、現在では人手不足もあって里町では山焼きを実施していない。除草剤が使用できないため、除草作業に労働力・時間がかかり消費される。

花卉をつけるまでに最低4年がかかる鹿の子百合の需要は、愛好家が圧倒的に占めるという。[H氏、D氏聞き取りによる]

現在里町で栽培されている品種は、ミネノサト、サトアキヤ、シロカノコ、ハゴロモの4種である。

1-2 甌島の伝統的な農地利用——公有地（コバ山）の活用

甌島の諸部落では、共有の農地（田、畑、原野）を持ち、それを各戸に平等に地割りして耕作し何年かごとに割り替えることが行われていた。この農地の割り替えは部落ごとの変異が激しく、1976年の調査当時では、すでに里村では全く割り替え農地はない状態であったようだ。[小野:1977:12]

公用地（コバ山）と言われる焼畑用地は地租改正時点では私有化されず、昭和30年まで共有地として割り替えを行っていたが、この年に当時の戸数に均分し、場所はくじ引きで分けて私有化した。コバ山は原野とも言われたが、山林ではなく古くから半常畑として耕作されたことは、みな石垣が築いてあり、山腹から山上へ段々に重なっていることからわかる。はじめ20年割り、10割りだったのを後には5年割りにしたという。小組合長と役場の係りがコバ山の1-2町歩を単位に小組合数に分けくじを引く。次にその年の旧10月16日の山溝の日に小組合ごとに現地でそのコバ山を戸数に分けてくじを引き、各戸ほぼ1反以下（10a以下）を割り当てる。それを雑木や草を切って耕作するが、不便な所が当たると放棄する者が多くなり、昭和30年に永代割にしたが、コバ山は村有地なので耕作権だけの私有であった。[小野:1977:12]

鹿の子百合は、従来切り替え畑地に野生したものが採取・利用されたので、半栽培型の植物と考えられた。コバ山に野生する鹿の子百合を「コバユリ」と言うが、このコバユリの生産が盛んだった頃はコバ山をユリ山と呼んだ。[小野:1977:15-16]

次節では、鹿の子百合生産の歴史、現状をそれぞれ述べ、里町[村]における鹿の子百合生産の変遷に触れたい。

1-3 鹿の子百合生産の歴史（表1）

鹿の子百合は、島の特産物としてだけでなく、救荒食品としても島民の暮らしに深く関わってきた。天明年間（1781～89年）の飢饉では、鱗茎（ユリ、タマネギなどの球根のように、まわりに肉厚の鱗形の葉をつけた地下茎）が食料となって島民を救ったという。[小川:2001]

鹿の子百合の輸出の契機は、シーボルトが江戸時代に滞在していた際、日本から鹿の子百合を持ち出してヨーロッパに紹介したことから、といわれている。明治初年頃から鹿の子百合の百合根を煮て乾かし、菓子原料として支那に輸出するようになった[小野:1977:16]が、大正初め頃より球根がクリスマス用の生花としてアメリカに輸出されることとなり[小川:2001]、昭和39年頃に最盛期を迎える。[H氏聞き取り及び図1-3]

コバユリ（一般百合とも言う。）球根採取が盛んだった当時、毎年新12月～2月頃に各戸1人ずつで山焼きをした。これをするので、百合根は大きく良質のものとなったからだ。旧10月～11月にかけて百合の口開けをし、共有原野の百合を各戸から2人くらい出て、今日はどの山、どの迫と決めて3日間ほど掘る。元は口開けの日は朝2時、3時と暗いのに提灯を灯して掘り始めたものだった。1人1日の収量は、極めて上手な人で150斤（斤＝0.6kg）、下手だと50斤ほどで、少しでもキズがあると山に埋めて帰った。[小野:1977:16]

鹿の子百合の一級品を生み出すための品種改良が実施されたのは、まさに高度経済成長期であった。系統百合の誕生である。横浜からS貿易・A商会、奈良からY農園、他箱根の方面からの商社が輸出の仲介を果たすが、彼らによる系統選抜はとても厳しいものがあったという。[H氏聞き取り] 当時、商社に販売するときは球根の大きさを指で判定し、A、B、Cのランク付けをした後、大中小混ぜて100斤に梱包した。どこの家庭でも何百箱も出荷していたそうで、中央公民館で品評会が行われることもあったという。[H氏聞き取り]

昭和44年以降、海外における鹿の子百合の価値が低下し商社との取引が減少していったことが、鹿の子百合の生産減少の大きな原因であった。鹿の子百合は球根で出荷されたため、その球根が花

表1 鹿の子百合年表

年	鹿の子百合年表
1782～1788	鱗茎を食用として島民は飢えをしのぐ。
1833～1837	鱗茎を食用として島民は飢えをしのぐ。
明治6年(1873)	干し百合製造が始まる。
明治27年(1894)	花百合輸出が手がけられる。
	石神弘志・村上權助が横浜に移出した。
	→採掘方法や荷造法などが不完全のために腐敗が多く、価格が暴落。
	球根の輸出を断念。
明治35年(1902)	横浜植木株式会社から社員が来て取引を始める。
明治36年(1903)	2、3の商館から出張員がきた。
	生百合輸出の端緒ができる。
	仲買人が協同販売輸出組合を作成し直接横浜に移出。
明治39年(1906)	各村の直接販売となる。
明治41年(1908)	横浜商人が仲買人から購入するようになる。→取引に不正が多く農民に利が少ない。
大正3年(1914)	村有志や栽培者などが販売組合を設立し、共同販売を始める。
	→輸出業者や仲買商人には勝てず、取引契約を破棄される。
昭和25年(S25)	鹿の子百合の出荷(輸出)が始まる。当時鹿の子百合1kgの相場は100円。
	切干甘藷41kg=1000円であったため、鹿の子百合の価値の高さがわかる。
昭和39年(1964)	行政が本格的に植物貿易に乗り出す。→系統ゆりの誕生
	商社への出荷は農家ごとに実施。
昭和40年(1965)	県が主になって「鹿児島自治会」を結成(4ヵ村合同)。
	「商社」対「生産者」のかたちで話し合いがもたれるようになった。
昭和42年(1967)	ゆり倉庫ができる。
	倉庫に入らなければテントを張ってその下に鹿の子百合の球根の梱包を置いた。
昭和44年(1969)	海外での価格が落ち込み、商社との取引が減少し、国内中心に出荷する。
昭和48年(1973)	この頃より一般百合の出荷数量が極端に減少していく。
昭和57年(1982)	一般ゆりの出荷終了。(4883球)
昭和59年(1984)	系統ゆりの出荷終了。(125844球)
平成9年(1997)	「鹿の子百合生産振興委員会」発足。

[里史書及びH氏、D氏への聞き取り調査をもとに作成]

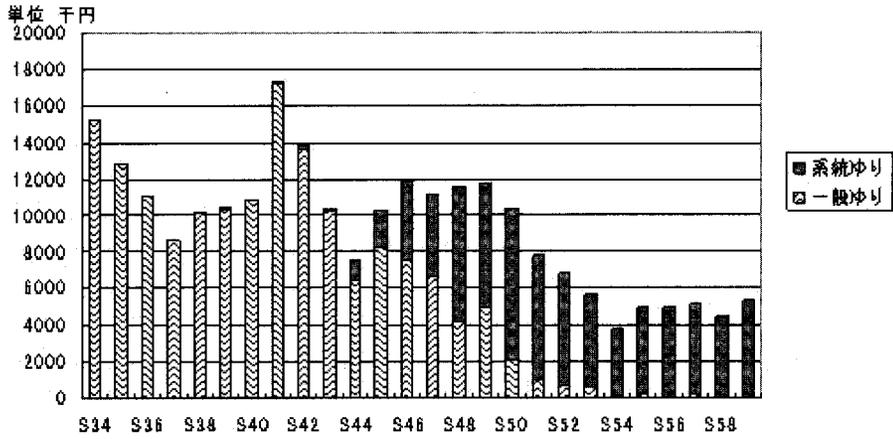
弁を付けるかどうかという不確定要素があった点、実際花卉を付けなかった球根が予想以上に多く海外からの苦情が相次いだ点 [H氏、D氏聞き取り]、また昭和48年に固定為替相場制度から変動為替制度に転換され、円高ドル安に移行していったことで輸出による利益が見込めなくなった点が商社撤退の原因といえよう。[筆者見解]

H氏は、鹿の子百合生産減少の要因として、取引の一切を商社に依存し、島民が独自に販売ルートを持っていなかった点も大きいとしていた。

販売ルートを閉ざされたと同時に、里町では鹿の子百合の栽培を放棄し離農する者が相次いだため、結果田畑は放置され、現在の山林化に繋がっている。

1-4 鹿の子百合生産の現在——「鹿の子百合生産振興協議会」について——

協議会代表のH氏が鹿の子百合を栽培し始めたきっかけは、当時集団就職をせず島内で農業に従事していたH氏が、当時の村会議員議長に認めら



一般百合とは「コバ（木場）百合」ことで、公有地に生息した在来種の百合を指す。系統百合は一般品種として商社用に作り出された百合のことである。

図1 鹿の子百合出荷高 [薩摩川内市役所里支所の資料をもとに筆者作成]

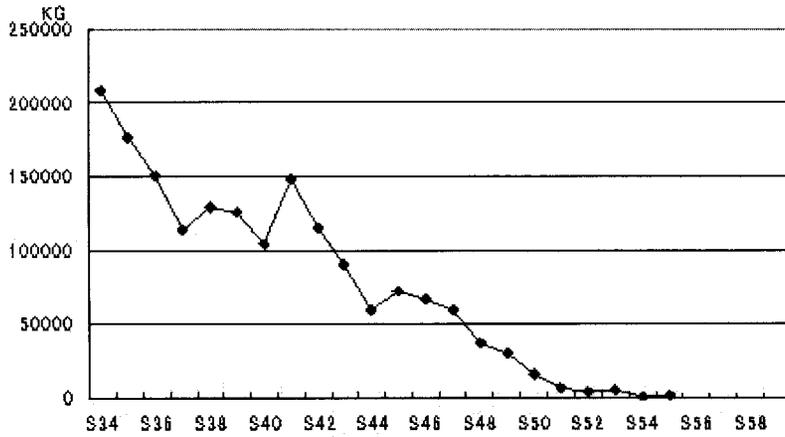


図2 一般百合の出荷量 [薩摩川内市役所里支所の資料をもとに筆者作成]

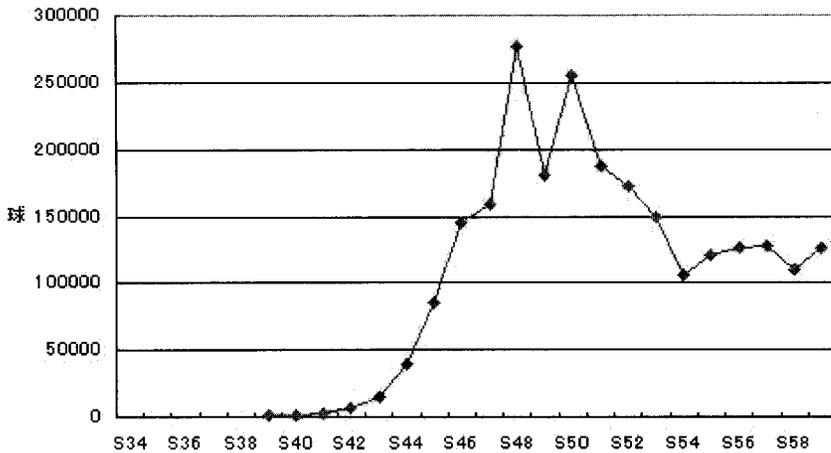


図3 系統百合の出荷量 [薩摩川内市役所里支所の資料をもとに筆者作成]

れ、鹿の子百合の鱗片の木子を譲り受けたことであった。鹿の子百合の栽培は困難であり、その市場価値も高かったことから、当時木子は島民でさえ簡単に入手できるものではなかった。H氏はまさに選ばれた人だったのである。

しかし、H氏も他の農民と同様、鹿の子百合栽培を放棄した時期があった。商社との取引が中止になったときである。H氏は畜産に従事したが、「鹿の子百合栽培は確かに重労働で苦しかったが、反面楽しかった。」と当時の心境を語った。そのH氏に、里町における鹿の子百合栽培の復活を目的とした「鹿の子百合生産振興協議会」の発足の話が持ち上がったのが、1997年、いまから9年前のことだ。当時の村長の「鹿の子百合を宣伝しているにも拘らず、その百合が里町にはない」という意見に基づいた発足であった。観光目的でもあったが、鹿の子百合が絶滅種とならないように、里町の「遺伝資源」として未来へと継承していくとする保存目的もあった。[H氏聞き取り]

現在、協議会は鹿の子百合栽培を手伝う仲間5人(全員男性)で構成されている。

元来鹿の子百合の自生地が自然に花卉をつけていたため、島民も鹿の子百合の明確な生態を把握できていないのが現状である。何故湿気に弱い鹿の子百合が高温多湿の甌島に自生するのか、何故同じ地域でも別の品種が自生するのか。本土にあるYフラワーセンター内研究所の鹿の子百合の生態調査を依頼したこともあったが、その実態は解明されなかった。その後H氏は島内の田畑を一部再生させ、独自で様々な実験を繰り返し、答えを導き出そうとしている。現在では、畑のほうが水田よりも鹿の子百合に適した土壌である点、pHが高いほうが花卉に赤みが増す点などが明らかになっている。

協議会で栽培された鹿の子百合の球根は、協議会のラベルが付いた専用のパッケージで郵送される。(ピンク色のパッケージは赤色のみの鹿の子百合の球根3球入って700円、緑色のパッケージは白色1球、赤色2球の組み合わせで価格は700円で販売。)パッケージ代金を別途100円徴収する。遠方の購入希望者は現金書留で支払うシステムである。上述したように、栽培が難しいとされる鹿の子百合は、当然苦情を受けやすい。H氏、D氏が専用のパッケージに拘る理由は、協議会の生産したことを明示することで、まがい物と区別

シトラブルを回避させるためであり、また購入者からの栽培過程での質問に円滑に対応したいためでもある。加えて、ブランド付けをしたことで、里町で栽培された鹿の子百合の価値が向上し、協議会を受け継いでいきたいと願う優れた後継者が出現して欲しいという思いも込められているようだ。

鹿の子百合の生態解明と資源保守、後継者育成が協議会の今後の課題といえよう。

おわりに

本小論では里町における鹿の子百合栽培の変遷を述べた。

鹿の子百合の生産に関して、昔のような最盛期を望んでいるかという私の質問に対し、D氏が首を振ったことは印象的であった。鹿の子百合栽培は、資源保守及び放置された田畑の再生を目指したものであり、環境を乱すほどの生産量を望んでいるわけではないという。D氏は島内出身者ではなく、薩摩川内市との合併の際里支所に転勤された方だ。だからこそ、D氏は里町に点在する荒地が美しい景観を損なっていることに敏感であるように私は感じた。確かに、鹿の子百合が栽培されている段々畑の背景に広大な海がひろがる景色は格別のものであった。この小論が、地元で当たり前と思う土地、海、鹿の子百合等は大変貴重な資源であることを、島外者のみでなく島民の方々にも知っていただくきっかけになれば嬉しく思う。

追記：本調査の聞き取りは、2006年7月1日から4日のかけて実施したものである。

参考文献及び資料

- 小川三郎(2001)『甌島』春苑堂出版
- 小野重明(1977)「生業」——鹿児島県教育委員会編「甌列島の民俗」pp.12-16
- 里村郷土誌編纂委員会編(1985)『里村郷土誌』pp.786-787
- 農林省統計調査部(1972)「1970年世界農林業センサス 農業集落カード」
- (財)農林統計協会(2002)「2000年世界農林業センサス 農業集落カード」
- 離島センサス2002